

● 管理釣り場、野釣りまで

浅ダナの両ダンゴ釣り

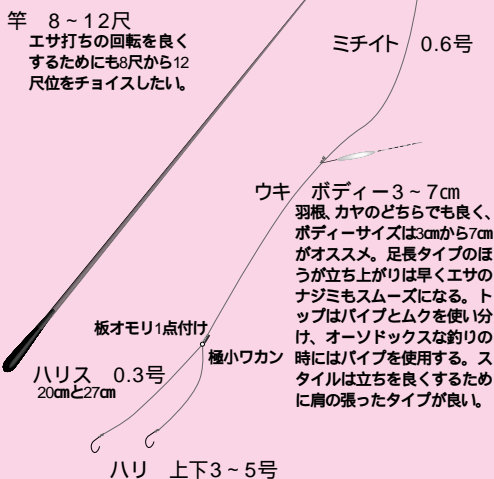
最近の傾向

盛期の浅ダナの両ダンゴ釣りは、大きく分けて2パターンの攻略法がある。ひとつめは極めてオーソドックスなもので、イメージ的にはしっかりとウキをなじませ、「タナを作りながら」確実に釣るスタイルだ。準山上湖や魚影の濃いダム湖など、またあまり浅いタナを攻められていない管理釣り場や比較的空いているフィールドで効く。

ウキを確実になじませて、狙うタナで強いアタリを出させて釣るため、しっかりとウキの動きを読むことがキモとなる。そして、へら鮒が寄り始めたら常に「深くなじませる」ことをイメージして、ウズリを防ぐことが好釣果につながる。

もうひとつは、警戒心が強く、タナに入らない手強いへら鮒をターゲットにする場合、落下するエサに興味を示す傾向が強くなるため、ストロー

仕掛け図



クを生かした釣り方が効果的になる。特に、へら鮒の大型化によってタナに入る量が少ない場合にはこの手の釣りが効き、日曜・祭日などの混雑時にも効果的となる。

軽いタックルにムクトップ仕様のウキでなじみ込みの途中で興味を示させ、エサが止まったワンチャンスで食い込

ませたい。そのため、エサの水中落下は極めて自然でなければならぬ。セツティングでは、へら鮒の大型化と逆行するが、超繊細なタックルでエサを食わせるというよりも「吸い込ませる」イメージが重要になるが、この釣り方で決まれば、スレも少なく完璧な浅ダナ釣りが実現できる。

パターン 1

推薦釣り場 = 魚影の濃い釣り場

バラケマツハ200cc +
浅ダナー一本200cc +
ダンゴの底釣り夏30 ~ 50cc
+ 水100cc



+



+



+



● エサ使いのコツ

【パターン】は、粉のうちにエサパウルの中で良く混ぜておき、そこへ水を加える。「バラケマツハ」のザラツ気がなくなるまでかき混ぜて一発で仕上げていく。特に、「ダンゴの底釣り夏」の量で硬さが変わるので、基本的には「ダンゴの底釣り夏」が30ccのときには水はジャスト100ccでよく、それを40ccにしたときには水100ccで一度作り、再度エサを練る手を全体に濡らしてもう一度かき混ぜる。さらに「ダンゴの底釣り夏」を50ccとしたときには、その作業をもう一度するとちょうどよい仕上がりととなる。

このブレンドの場合、「エサを練る」ということを意識して、ボソツ気を残したままの仕上げにはしない方が釣りやすい。魚影の濃い釣り場をターゲットとしているため、「両くわせ」に近いタッチに仕上げるのがポイントだ。

イメージ的には、水を注いでから全体をかき混ぜ、「バラケマツハ」のザラツ気が無くなるまで練っていく。回数的には30回以上練るようになるが、「浅ダナー一本」がブレンドされているため、水中での膨らみは保てる。このエサを今度はゴルフボール位に小分けにして微調整をする

が、押し練りを数回加えることもあれば、若干手水を打ってしなやかにすることで決まることもある。一番ヒット率の高いタッチをそのつど探すようになるが、「くわせエサに限りなく近いダンゴ」のため、過剰に魚を寄せることもなく、コンスタントにスレも少なく釣り込むことができる。

【パターン】でウキの動きが悪いときは、水中での膨らみが不足していることが考えられる。ただし、ここで生の麩を差し込んだり、極端なベトコンタッチにしたのでは、一気に食い気のある魚までウズリを起こしてしまう。そこで、「浅ダナー一本」を200ccから100ccに変えて、さらに「パウダーベイトヘラ」を100ccブレンドすることで、タナでの“膨らみ”と“バラケ性”が増すようになる。

粉のうちにエサパウルの中でよく混ぜておき、水を加えてかき混ぜ、パターンと同様に仕上げて使う。「パウダーベイトヘラ」をチョイスするのは、適度の大きさの粒子を生かすため、この僅かな素材の変化に魚も反応するようになる。だからあえて、さなぎ粉の多い素材は選ばず、常に“適度にタナに寄せる”ということを大切にすることが、スイッチ版【パターン】のポイントとなる。

パターン 2

推薦釣り場 = 魚影の濃い釣り場【パターン 2】のスイッチ版

バラケマツハ200cc +
浅ダナー一本100cc +
パウダーベイトヘラ100cc +
ダンゴの底釣り夏30 ~ 50cc
+ 水100cc



+



+



+



+



パターン 3

推薦釣り場 = 魚影の薄い釣り場

バラケマツハ200cc +
段差バラケ200cc +
GTS100cc + 水100cc



+



+



+



パターン 4

推薦釣り場 = 魚影の薄い釣り場【パターン 4】のスイッチ版

バラケマツハ200cc + スーパーD200cc + 軽駄100cc + 水100cc



+



+



+



●エサ使いのコツ

【パターン 4】のエサには、バラケ性が強いエサがブレンドしてある。【パターン 1、2】との違いはあくまでもボソツ気を残して仕上げるようにすることで、水を注いだ直後に手を熊手型にして大きくかき混ぜ、そのまま5分放置する。

使用するとき初めてエサを小分けにして手水を打ち、押し練りを加えながらなじみ幅を調整するのがポイント。

このエサはエアを含ませて仕上げるため、基エサの段階では強く練り込まないように注意する。エサ持ちが悪いときには駄材4カップに水1カップで1回しっとりタッチで仕上げ、20~30回の練りを入れ、最後に駄材1カップで仕上げるとハリ持ちもグンと良くなる。

具体的には「バラケマツハ」2カップ「段差バラケ」2カップに水1カップを入れて全体に水を浸透させ、20回程練り込む。そして、最後に「GTS」を1カップで水分を吸収するようにからめると一緒に練り仕上げとは違ったタッチ

となり、エサ持ちもよくなる。後は、今までの使い方と一緒に若干エアを抜いたりしながらなじみ幅を調整する。

魚影の比較的薄い釣り場では、エサのバラケ性が重要になる。そこで、バラケ性の強い「バラケマツハ」と「段差バラケ」をベースにして更に荒い駄材が入っている「GTS」をからめるが、ときには、荒い駄材よりも細かな煙幕状の粒子に反応することがある。

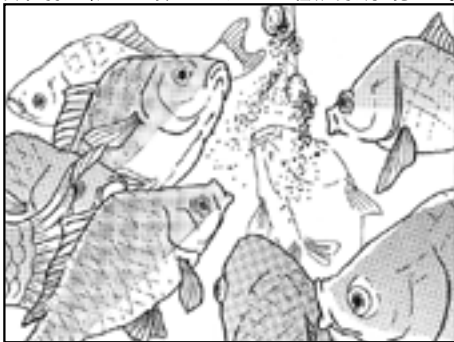
そんなときには【パターン 4】のスイッチ版【パターン 4】のブレンドが有効。「スーパーD」は練り加減で自在にバラケ性が調整でき、「軽駄」は細かな微粒子で水中に広く拡散して刺激を与える。

バラケ性の強い荒い駄でウキの動きが悪いときには、逆の発想で細かな粒子に反応させる。これが最新の駄材テクニクである。





ウキを深くなじませタナを作って釣り込むパターンと落下中のエサに興味を持たせ、追わせて食べるパターンの2種類の釣り方を覚えたい。



●釣りのコツ

魚影の濃い釣り場

釣り方のコツは、「両ダンゴだがイメージ的には、『両くわせ』に近いダンゴなので、テンボ良くエサを打ち込み、なじみきつてもサワリがないときはすぐに打ち返す。理想的なアタリの取り方は、トップの付け根でやや止めが入り、なじみ込みながらの『ツン』に絞り込む。

魚影の薄い釣り場

釣り方のコツは、しっかりとウキをなじませてその位置でサワリを出させる。肩の部分でのサワリが強いときにはややしつとりネバにエサのタッチをかえて魚をタナに安定させる。反対にサワリが少ないときは、エサ付けをややラフにして落下時からバラケ性を強くするのがポイント。

エサの大きさ&オモリ量

エサのサイズ
ハリ付けのエサのサイズは、直径1.4cm程度で、あまり大きくはハリ付けしないこと。

エサ
実寸大



板オモリ
実寸大

板オモリ
実寸大

オモリのサイズ
浮力は0.25mm厚の板オモリで、1.2cm x 1.7cmから2.2cm x 1.7cm位のものを選ぶ。

浅ダナの両ダンゴ釣り こんな時どおする?

Q1
エサを打つと
ウキが
沈没してしまう

A1
まず、使用しているトップの浮力に対してエサの比重の方が強いので、エサをやや軽くしてやろう。次にへら鮒の寄りも少ないとエサが持ち過ぎるため、テンボ良くエサを打ち込みへら鮒を寄せたい。落とし込みでエサを打ち込んでいたのであれば、やや振り切り型に変えてみよう。エサの落下カーブを大きくするだけでなじみ幅も変わってくる。また、使用しているウキをワンスイズ大きくしてエサを支えられるようにする方法もある。特に、魚影の薄い釣り場で重さのあるダンゴをしっかりとなじませる地合のときには、エサにタックルを合わせる事が大切になる。

2

ボソッ気があると
ウワズリ、
やわらかくすると
タナまで持たない

2

盛期の典型で、ボソッ気の強いエサでは水面直下までへら鮒が浮き上がってしまう。そんなときには徐々にエサのタッチを“ボソ”から“しっとりネバ”に変えるが、やわらかくするとタナまでエサが持たなくなる場合が多い。エサのタッチは合っているのに、タナまで届けられない、そんなときには無理してエサをいじるのではなく、ハリのサイズを大きくしてハリ持ちをアップさせれば良い。盛期の浅ダナ釣りに限らず、エサとタックルのトータルバランスで地合を作ることも大切になる。



3

地合を
安定させたい
のだが...

3

しっかりとタナを作り、強いアタリを取るようになれば、狙うタナにへら鮒が厚く寄り、地合は作りやすい。しかし、ストロークを生かした釣りの場合は、タナにエサを吊るして食わせる釣りではないため安定しにくい。そんなときの釣り方のコツとしては、アタリを取る位置を意図的に徐々に深くしていく方法がある。速効の釣りではないが、時間の経過とともにウキを入れながら釣ることで、この釣り方でもタナを作ることができる。イメージ的にはボディの付け根でトメがあり、なじみながらの“ツン”を送ると、再度深く入りながら食いアタリが発生する。このパターンになれば地合は続く。

4

ハリスの長さが
わからない

4

浅ダナ釣りのハリスは、長過ぎればへら鮒に叩かれエサ抜けを起こしてしまう。反対に短いハリスではサワリも少なくなり、食いアタリにつながらなくなってしまいます。基本は釣りの状況によっても異なるが、管理釣り場では20cmと27cmからスタートして2cmきざみで微調整。魚影の薄い釣り場ではもう少し長くして30cmと38cmくらいが適している。“カチッ”“ツン”と明確なアタリが出ていればOKで、“ズルッ”というイトズレが多ければ少しずつ詰め、サワリが少なければ伸ばす。終日同じハリスの寸法で決まることは少ないので、こまめに調整することが大切だ。

5

エサの手直しの
コツは？

5

【パターン】は、「ダンゴの底釣り夏」の量がキーポイント。ウキがなじまないとき、明確なアタリが出ないときは多く、アタリやサワリが少ないときは量を減らす。サワリの量を調整する際には大きくタッチを変えるのではなく、ハリ付け時の圧や形で変化をつける。【パターン】は、ボソッ気が基本で、手水を打ちながらの「握り練り」「押し練り」「擦り付け練り」の3種でウキの動きの変化を見極める。ポイントは、エサボウル全てのエサに手を入れるのではなく、小分けにしながらか調整することが大切だ。



握り練り



押し練り



擦り付け練り